
吸血鬼と僕

岳人さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼と僕

【Nコード】

N0450P

【作者名】

岳人さん

【あらすじ】

現代に生きる吸血鬼と現代に悩む大学生の物語。

邂逅 1 (前書き)

自己満足作品ですけど、読んでくださったら嬉しいです。

邂逅 1

人間の特筆すべき能力はその知力にある。彼らは空を飛べず、速く駆けれず、海を遠くまで泳げない。しかし彼らは空を飛び、速く駆け、海を横断する。

知力とは学習能力である。彼らは鳥に学び、馬に学び、魚に学んだ。

歴史を重ねる度に、彼らは英知を積み重ねて行く。ほんの少しの時間で、目覚しい進歩を見せる。人間の興味深い点だ。歴史が少し居眠りをする、目を開いたときには彼らは空を飛んでいるのだから。

彼らは世界を隅々まで探索し尽くしたと思っているだろう。事実その通りだ。高山の頂上、深い森の奥など、情報を得にくいところ（もちろん開拓されてはいるが）以外の場所では、日々最新の情報を取得し、共有している。

しかし、忘れてはならないことがある。

100個の箱があるでしょう。君たちは、99個箱を開けて、何も入ってなかったから、100個目にも何も入ってないだろうと思うだろうか。恐らく大勢の人がイエスと答えてくれるだろう。

この例は極端すぎるが、つまりはそういうことだ。

99%世界を開拓しても、残りの1%に、非常に興味深い事実が隠されていることを彼らは知らないのだ。

————————————————————

アルバイト。学校。アルバイト。学校。アルバイト。アルバイト。学校。アルバイト。アルバイト。学校。

こう並べてみると、ちょっとだけ小気味良いリズムを感じられる。身体の疲労感が少しだけ癒される。アルバイトを終え、帰宅途中の

僕は、下らないことを考えてちよつとだけ微笑んだ。下らないことも、実は大切だ。僕の表情に、笑顔という項目があったことを思い出させてくれる。

空を見上げてみる。冬の夜空は何故か透き通って見える気がする。星が輝いている。小学校で、オリオン座がどうのこうのと習ったことを思い出した。星を見て思いを馳せても、寒さは和らがないけれども。しかし、明日も頑張ろうという活力が沸いてくる。

朝、起きられるだろうか。布団の温もりは身近な冬の風物詩だ。僕をそこに縛り付けるという点で。冬は活動することが億劫になる。炬燵より、お鍋より、何より冬の的確に表現している季語だと思う。自宅に帰り着く。歩いていたから、少しだけ身体が温かい。一人暮らしだから、夜ご飯を作らなくてはいけないし、部屋干しの洗濯物を片付けなくちゃいけない。母親の偉大さを感じる。ここにきてから感じっぱなしだけど。でも、今日は気分が良いからだいたいまただけ呟いてみる。やっぱりくだらないけれども、微笑がもれてしまう。

そして、聞こえないはずの返事が、お帰りとだけ聞こえた。

少年が硬直している。まあ、当然のことだろう。勝手知ったる我が家に帰ってきてみると、知らない人がデスクのパソコンに向かって、コーヒーを飲みながらニュースを閲覧しているのだから。人間は想像の及ばない出来事に突如として直面すると、思考がフリーズするように出来ているらしい。

不法侵入と呼ばれる行為を何度も繰り返してきた私だからわかることではあるが。

「あ、あなたは誰なんですか？」

少年が問う。問うというよりは、震えた声を何とか絞り出した感じだ。彼はダウンジャケットのポケットに入れていた両手を出した。

恐らく私に対して身構えているのだろう。腰が引けているのが少々可愛らしい。

「人に名前を聞くときは、自分から名乗るのが筋だろう？ 私は何々と申しますが、から自己紹介を始めたまえ。円滑なコミュニケーションの基本だよ」

「え？ あ、そうですね。じゃなくて！ 泥棒ですか？ それとも僕の両親の知り合いですか？ あなたが僕にとっての不審者ということわかりますよね。早いところ説明をしてください。僕は市民ですから、あなたを警察に通報する義務がある」

意外とスラスラと物事を喋れるじゃないか。異常事態に直面しておきながら大したものだ。この少年に私は少しだけ興味が沸いた。彼の緊張もわずかに薄らいだようだ。上手く運べば、もうすこしだけこの不思議で間の抜けたお喋りを楽しめるかもしれない。楽しみは多いほうが良い。事に移る前に、興じてみるでしょう。

「その二つの質問には、どちらもノーと答えよう、少年。私は君の名前が知りたいと思う。だから名乗ろう。私はアデレイド・エルフインストン。出身はイギリスだ。日本は住みよい国だから長年住んでいるよ。流暢なのも理解できるだろう？ さあ、次は君の番だよ、少年」

「嘘をつかないください。あなたは僕の家のコーヒーを無断で飲んでる。そして、パソコンを使っているから電気を盗んでいることになる。あなたが何を言おうとあなたが泥棒の事実に変わりはありません」

「ケチくさいのだな、少年。対価が必要なら払おうじゃないか。気付いたのだが、君は人に向かって話すとき、目蓋を閉じる癖があるようだ。それは出来るなら今すぐ止めた方が良いと訓告しよう。特に、この会話の場ではね」

「あなたは何だか悪い人では無いような気がします。もし今、この家から立ち去るのであれば、僕は何も見なかった、聞かなかったことにしま……ッ!？」

「悪い癖だね。私の言葉が無視して目を閉じたのが反省点だ。是非直したほうが良いだろう」

どこまで聞こえたのかは量りかねるが、恐らくは何も聞こえてないだろうし、覚えてもないだろう。失神とはそういうものだ。人間は脆い。少し首を絞めると途端に意識を失ってしまう。それは紅茶を淹れることよりも簡単だ。さて、名前を聞き忘れてしまった。これは私の反省点だ。

ともあれ、頂きます。

――――――――――

目が覚めた。朝の日差しが眩しい。良い天気だ。今日は部屋干しをしないで良いかもしれない。カーテンを閉め忘れて寝ていたことに気付く。もし、覗かれていたら恥ずかしいなと僕は思った。そんなことをして誰が得するのかは全くわからないけれど。

身体が気だるい。布団の温もりが心地良い。二度寝しようかと思ったけれども、空腹なのと、髪の毛にスタイリング剤が付いたままなのがちょっとだけ気持ち悪い。お風呂もご飯も済ませなかったのか。自分のズボラさにちょっとだけ嫌気が差す。

でも、昨日は何をしていたのだろう。思い出してみる。アルバイトを終えて、のんびり帰って、帰宅して、ただいま。そしてお帰りの返事・・・？

ハッと気付いて飛び起きる。

あれからどうなった。財布を確認する。ズボンの後ろポケットに入っただけだった。お金は無事だ。デスクの引き出しを開け、通帳を探す。無事にあるべきところに収まっていた。金銭に関しては何も盗られていない。

確か、帰宅すると、デスクでコーヒーを飲みながらパソコンをいじっている女の人がいた。外国人だと言っていた気がする。綺麗な人だった。違う。そこは重要じゃない。彼女は何が目的だったん

だろう。僕は彼女と話していた。確かに話をした。だけど、いつの間にかベッドで寝ていた。

なら、やっぱり夢を見ていただけなんだろうか。

釈然としないけれど・・・そういえば、今は何時だろう。ベッドのサイドテーブルに置いてある時計を確認する。

時間が止まった。その瞬間も時計の針は進んでいるけれども。正確に。僕にとっては冷酷に。つつがなく物事が運んでいけば、一限の授業が開始されて中盤にさしかかり、聴講している生徒がポツリポツリと入眠する時刻であった。

遅刻だ。やってしまった。まあ、諦めよう。いつも真面目に出ているんだから、一つの授業を休んだところですぐに取り返せる。掘った穴は埋めることが出来るものだ。とりあえずはお風呂に入らなくちゃ。

悶々とした気分を、頭の片隅に追いやって、僕は一日を始める。

邂逅2

週末。健全な大学生なら、部活やアルバイトに精を出したり、一日を寝て過ごしたり、レポートを書き上げたりしているだろう。もちろん、気の置けない友人と下品な飲み方でお酒を飲んで、下品な話題に華を咲かせることもあるだろう。

僕の場合は、そのどれも無かった。この世界は良くできているようで、物事は大抵僕たちが予想している水準の斜め上に行く。ボールを狙ったところに投げれないのと同じだ。近からず遠からず、絶妙に狙いから外れてしまう。

あの奇妙な夜から数日経ち、あれは夢だったのだと、そう納得していた。それよりも日々の生活が重要だから、学業にアルバイトに奔走していた。そして、久しぶりの休日をどのように過ごそうかと、心地よい布団の温もりの中でぼんやり考えていた時だった。客の来訪を告げるチャイムが、やかましく鳴ったのは。

「やあ。元気にしてたかい。今日から隣に住まわせてもらうよ。どうぞよろしく」

とても綺麗な女の人が挨拶に来た。ちょっとだけ見惚れてしまう。同時に、パジャマで応対したことを恥ずかしく思う。どうやら隣に越してきたようだが、最初の文言はどういうことなんだろう。とりあえず、挨拶を返す。

「あ、こちらこそよろしくお願いします。ところで、僕とどこかでお会いしたことはありませんっけ」

「いやだな。覚えていないのかい？ この間、私は君の家にお世話になっていただけね。ああ、そうそう。美味しかったよ。ごちそうさま」

「え？ いえいえ、どう致しまして。じゃなくて！ どうやら僕と

あなたは面識があるようなのですが、残念なことに僕はそれを覚えていません。よかったら説明してもらえます？」

何が美味しかったのだろう。僕の家で来客に出せる物といえば、安いインスタントコーヒーくらいしかないのだけれど。確かに、この女性にはコーヒーが似合いそうだ。もしくは紅茶。僕は料理が苦手だし、ここ最近何かを調理した覚えは無いし。

「ああ、覚えていないのか。やっぱりというか、そういえばどうか。そうだね。君は今晚予定はあるかい？ よければ夕食と一緒にどうだろう。私は料理が得意だね。引越し祝いを兼ねて懇親会をしようじゃないか」

「え？ あ、はい。僕は今日は一日中暇ですから、大丈夫です。って、いやいや。僕とあなたの関係について説明は？ どうしてそんなにフレンドリーなんですか？」

「一度にする質問は一つにしたまえ。二つも三つもするものじゃないよ。円滑なコミュニケーションの基本だ。前にも話しただろう？ さて、一つ目の質問だが、それは今晚の食事の時にするのが良いだろう。君には記憶が無い夜があるはずだ。その悶々とした疑問を解決させてあげよう。二つ目。私は気に入った人とは必ず食事を共にしてみるようにしているんだ。こればかりは性格と生活習慣だね」

「なるほど。ありがとうございます」

なんとなく、悪い人じゃ無さそうな気がする、というのが現時点で抱いた印象。それはこの女性が余りに気さくだからでもあるし、容姿がとても美しいからでもあるそうだ。

その後、ディナーの詳細な約束を交わし、僕は部屋に戻った。単刀直入に言おう。僕は女性の部屋に、それも夜に訪問する運びとなった。会話からもしかしてとは思っていたものの、まさか本当にお呼ばれするとは。僕も捨てたものではないかもしれない。胸がドキドキする。僕も女性経験が無いわけでも・・・あった。いわゆる童貞ボウヤだ。しかし接吻くらいはしたことがある。あれは高校の時

の・・・じゃない。感傷に耽っている場合じゃない。どうしよう。髪が伸びすぎているし、切りに行こう。髭も剃らなくちゃ。ああ、最近散財をしていなかったし、服も買いに行こう。今日は忙しいけれど、素敵な休日になりそうだ。

かくして僕の怠惰な休日は、僕をおめかしする休日に変身を遂げた。

――――

夕暮れ時。初冬の寒空に木枯らしが吹き、色を変えた木の葉のコンフェティが舞う。僕はその中を、ポケットに手をつ込んで歩いていた。もちろん、新しい冬シーズンの洋服が入った紙袋を提げながら。頭はスパイキーショートとかいう、いかにも今風といった髪形に変貌を遂げ、美容師に適量のワックスでスタイリングしてもらった。後は着替えを済ませれば、僕もちょっとだけオシャレさんの仲間入りを果たすことができるかもしれない。お金は天下の回りものだから、たまには豪勢に使ってみようと思ったものの、染みついた貧乏性は中々抜けないものだ。購入した中で高価な物は新しいジャケット一着のみで、後はタートルネックのTシャツやニットなど、安価で温かそうな物。染みというものは、いくら入念にクリーニングしようとしても簡単には取れない。

約束より早く準備が整ってしまったためか、安らぎの我が家にいるというのに居心地が悪い。落ち着かないのだ。ワクワクしているのか、ドキドキしているのか。カップラーメンにお湯を注いだ時のあの空白時間に似ている。空白を見ると、落書きしたくなるのが人間の性だ。何かをして、気を紛らわせたくなる。ということで、掃除を開始した。しかし、狭い居住スペースだから、すぐに終了してしまう。散らかった衣服を片付けるだけだし、キッチンは常に清潔を心がけている。結局瞑想にふけることにした。目を閉じて、いわゆるキャッキャウフフな状況を妄想するだけなのだけれど。

チャイムが鳴った。例の女性だ。胸の高鳴りが一層激しくなる。
しかし、出陣の時だ。漢になれ、僕。お父さん、お母さん。僕は今
日、大人になります。

邂逅 3

「やあ。君にとっては勝手の知らぬ他人の家というものは落ち着かないだろうが、まあ無理矢理リラックスしてくれたまえ。約束のデイナーはもう完成しているから、すぐに出すよ。少しだけ待っててくれたまえ」

僕は今女性の部屋にいる。白の壁紙に黒の家具で統一されたモノクロームの部屋。なんとなく現代のコントラストアートを連想させる。悪く言えば無機質だけれど。でも、清潔感が素晴らしい。僕はとりあえず、黒のカーペットの上に佇む、背の低いテーブルの前に座る。上座の位置にはなるが、玄関側にキッチンが配されてるため、こちらの方が女性にとって便利だろうから。

「待たせて悪いね。それではデイナーを始めよう。君はお酒は飲めるかい？ 年齢でなく、肝臓的な意味で。私はワインが好きでね。よかったら乾杯しようじゃないか」

「ええ、大丈夫ですよ。それなりに強い方だと思います。是非、乾杯しましょう」

料理が並べられた。ステーキである。ライスも茶碗ではなく平皿に盛られている。あの人はワインを注いでくれている。材料は不明だが、パツと見ると少し高めのレストランで食事をする気分になる。そういえば彼女の名前も知らないことに、今更気付く。金髪碧眼、長身痩躯、おっぱいもまあまあ。僕の大好きなタイプ。だめだ、気が早いぞ、息子。

「どうしたんだい？ ぼけっとして。一人暮らしの男の子には豪華な食事だろう？ 私という美人もいるからね」

どうやら彼女は準備を終え、僕の呆けた顔を見てにやにやしていたようだ。いけないな。下心は見え見えか。それにしても彼女は何か大企業の社長が悪巧みをしているようにすら感じる。

「いえ、何でもありませんよ。緊張しているだけです。今日は本当にありがとうございます。ところで、お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「アデレイド・エルフィンストン。見ての通りの外人さ。出生はイギリス。まあ、このやり取りは二回目なのだけれどね。昔はアディとかアデルとか呼ばれていたね。君も好きなように呼んでくれたまえ。日本に来てからはエルさんだのアデさんだの呼ばれることが多いから、参考にしたまえ」

何故だろう。今更ながら気付いたけれども、この人はすごく高貴な目線から会話をしている。良家の生まれなのかもしれない。ただ、イヤミったらしくない、清楚で誠実な印象を受ける。僕がこの人を何だか悪い人だと思えないのはその所為だろうか。

僕も自己紹介を返し、しばし雑談をする。主に僕の生活についてだけれど。この人・・・アデさんは余り自分のことを話したがらないようだ。その雰囲気を感じた僕は、とりあえず自分のことについて話している。ときおりさり気なく質問を試みるが、スルリとかわされてしまう。だけど、アデさんとの会話は楽しい。彼女の話は含蓄がある。本当に見た目どおりの年齢なのかと疑ってしまうくらいに。僕の生活に気さくに、そして厳しくアドバイスをくれた。しかし、本題はそこではない。僕の欠落した記憶についてだ。

「ところでアデさん。数日前の夜なんです、一体何があったのですか？」

切り出し方を考えても、良い案が思い浮かばなかったので、単刀直入に言ってみる。僕は婉曲なことが嫌いだ。いつもストレートに話を切り出してしまふ。それは僕の悪いところでもあり、良いところでもあると認識しているけれども。さて、振る刀の切れ味はどうだろうか。

「ああ、君をオトして血を吸わせていただいたんだ。改めて礼を言おう。ごちそうさまでした」

整頓と掃除とはどう違うのだろうか。整頓は並べ替え、掃除は汚れ落としという具合なのかな。ならば、僕は今その両方をする必要があるようだ。

頭が混乱しているが、簡潔に言おう。アデレイド・エルフィンストンは吸血鬼だ。おとぎ噺や、世界史でしかお目にかかれないような存在。考え方によっては希少価値のある存在だ。だけれど、僕のイメージしていた吸血鬼とは違って、彼女に血を吸われても僕は吸血鬼にはならないし、日光浴をしても消滅しない。日焼けサロンにすら行くらしい。彼女はニンニクが大好物であるし、アクセサリーも十字架をあつらえてあるものを好む。もちろんシルバー製だ。曰く、

「私が自分のことを吸血鬼だと言うのはね、それが一番近いイメージだからさ。私はこれのある種の病気だと捉えている。血液系のね。ご先祖様は健全な人間の血を飲んで自分の血を薄めようと努力していたみたいだけれど。私にとって吸血行為は、君たちにとっての性行為と一緒さ。なんとなくムラムラきてやってしまうものなんだ。一般に吸血鬼の弱点となるモノは私たちには無効だ。普通の人間と同じように生活できる。ただ、寿命がとても長くなってしまうこと、子供が産めないことが困っていることといえど困っていることさ」

ということである。ちなみに歳を聞いてみると、

「レディーに歳を聞くのかい？ 君の実直さは良いところだけど、デリカシーを持ちたまえ。私は大体六百歳くらいだと覚えておきたまえ。こんなに長く生きていると、誕生日すら忘れてしまう。母親の顔も思い出せないね」

とのことだ。

要するに僕は、世間一般の人が十回くらい生まれ変わっても体験できないような出来事に巻き込まれたらしい。だけれど、料理は美味しかったし、アデさんは嫌いじゃない。二回程度しか顔を合わせた

ことがないけれど、僕はもっとアデさんのことを知りたいと思うし、忘れていることを思い出させてあげたいと思う。何にせよ、興味深い体験ができて僕は幸運だと思う。

以上が、吸血鬼と僕の出会いだ。

広島1

恋人と過ごす一時間と、焼けた鉄板の上で過ごす一分は、同じ長さの時間らしい。どこかの偉人さんが言っていたことを思い出す。もちろん時間という概念の上では異なるのだが、人間の体感時間の話だ。僕は交友関係が広くないから、盛り沢山のイベントを楽しむに待つ人々の姿を眺めながらコンビでアルバイトをする。時の流れがのんびりしすぎてやしないかとも感じる。

そりゃあ、僕だって混ざりたい。お酒の席の勢いで女の子とイカンジになったり、男同士のむさ苦しいが、どこか爽快なバカ騒ぎだってしてみたい。

だけど僕の気質はそれを許さない。いや、修行をしているとか、苦行が好きだとか、そういう話じゃあないんだ。ただ、みんなどこか上辺だけで、心の壁が厚いと感じるから。女性の厚化粧と一緒に、表面だけ塗りたいくって、素顔を隠し、素顔を飾る。それも一つの礼儀なのかもしれないけれども。

しかしながら、僕も人一倍その性格が強い。外を出ると常に仮面をかぶっているような心地にいる。人と接するのが苦手なんじゃないって、むしろ上辺だけのやり取りは、そういうスキルを学べる気がして、面白いとすら思う。だから僕は仮面を被り、舞台上に上り演技をする。つまり僕も厚化粧なんだ。

十二月。先生が走り回るほど忙しい月。書類整理、決算、大掃除、忘年会、クリスマス、年越し。僕はそのどれにも関与しない。交友関係が広くないとは言ったけれど、誠実に心と心を通わせられる友が少ないだけ・・・というか、一人だけで。そいつは今僕の住居とは遠く離れているから、たまにメールや電話をするくらいだ。アルバイトについても、もう三年もやっているから、店長からの信頼も厚い。だからそこそそ責任のある仕事を任されることが多いのだけれど、十二月だけは僕はすべてをお断りしている。疲れてしまうか

らね。仮面を被ると息苦しい。苦あれば楽ありなんだけれど、そこ
まで僕は我慢強くない。ありていに言えば、十二月は僕にとって憂
鬱な月だから、一人でじっと身を縮めてやりすごすんだ。

だけれど、今年は違った。

――――

「いらっしやいませーこんばんはあ」

同僚の気の抜けた声が店内を通過する。オーナーや店長はどうか
しらないけれども、僕らアルバイトは基本的にやる気がない。店番
をして、した時間分だけお金がもらえる。売り上げが上がったとこ
ろで昇給もなければ賞与もないから。だけどただ一人、やる気に満
ち満ちていて、視認できるほど輝き溢れるオーラを纏う者がいた。

「いらっしやい。今晚はよく冷えるから、私が仕込んだおでんでも
どうだい？ 味はそこそこだが値段は安いからね。というのも、セ

ール中だからさ。全品30円引き。是非購入を検討してくれたまえ」

アデレイド・エルフィンストン。僕の隣に引っ越してきた吸血鬼。
あの晩餐の翌日に職場に来たら、店長が紹介してくれた。まあ、仰
天もしたし、絶句もした。けれど、僕は彼女に好意を持っているか
ら、すぐに気をとりなおして仕事を教えた。まあ、形式上なのだけ
れど。年齢から察するに、彼女の人生経験は常人の十倍程度だろう
から、言ってしまうえば慣れているのだろう。どう転ぼうと彼女は新
人にありがちな、ぎこちない動きや喋りはしないし、何より似合わ
ない。しかし、やはりあの語り口は変わらないようだ。彼女らしい
と言えば彼女らしい。

僕は彼女のことをアデレイドと呼ぶことにした。さん付けはお氣
に召されなかったから。そして僕と同僚とアデレイドで回すコンビ
ニは盛況と言わざるを得ない。本当にコンビニなのかと疑うくらい
に。こった返すという表現が適切だと僕は思う。だから、憂鬱な月
のアルバイトも、光陰矢のごとしだ。

「やあ、お疲れ様。コンビニバイトとはいえ、忙しいものだね。全く。私は疲れなど溜まらない性質なんだけど、君はどうだい？　クタクタだろう？」

「そうですね。クタクタと言う他ありません。コンビニだというのに・・・」

もはや会話をする余裕は無いのだが、アデレイドとの会話は不思議と僕の身体に活力をもたらしてくれる。さながら神仏にお祈りして、スッキリした顔で帰っていく信者達みたいに。

「年末はどう過ごすんだい？　君は日本人だ。やはり実家に帰って、炬燵にみかん、お鍋に特番かな？」

「いえ、僕は実家には帰りませんよ。もういい歳です。親の顔を見ると甘えたくなってしまうから、自粛してるんですよ。両親は寂しいみたいですけれど」

ちよつとだけ、嘘をついた。実家・・・つまり地元には僕の同級生、まあ、顔見知り程度の面識しかないけれども、彼らがいる。彼らは年末、楽しくバカ騒ぎしているらしく、それに出くわした時のことを考えると、やはり地元に戻る勇氣はない。せつかくこちらで楽しませてもらっているから、無理に戻る必要は無いと思う。少し、寂しいけれど。

「それならば、私と一緒に旅行でもしないかい？　私にとって身寄りというべき存在はいない。日本の大晦日は風流で趣があるとは思うが、流石に孤独では辛いからね」

驚いた。僕がアデレイドに気に入られてることは薄々感じてたとはいえ、彼女から独りが寂しいなどという言葉が飛び出すなんて。

「私は寿命が長い。無限なのかもしれない。するとやはり近い友人は皆、逝ってしまう。少々意外だっただろう？　まあ、老人というものは得てしてそういう存在なのだよ。移り行く時代に残され、自由の利かない身体で余生を過ごす寂しさは、万国共通さ。私

も元々は人間だった。まあ、人の心が残っているということだろうね」

誰にともなく話すアデレイド。もしかしたら独り言なのかもしれない。あるいは手記を声に出して読んでいるのか。僕の想像し得ない、教科書でしか知らない長い年月は、彼女にどのような影響を与えたのだろうか。

「いいですよ。行きましょう。むしろ、是非に」

先ほどの問いに僕は答える。

「年輩には優しくするものですからね」

冗句を言ったつもりだった。しかし、僕は後ろめたさを覚えた。だけれど、気にしない。

「そうかい。ありがとう」

微笑むアデレイド。また一つ、僕は彼女を知った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0450p/>

吸血鬼と僕

2011年1月7日04時10分発行